- ある音が，前後の音と類似する現象を assimilation（同化）と呼ぶ。
- have/has to の[v/z]は後続子音[t]が無声音なので無声の[f/s]となる。voicing の assimilation の例。

	æ	v	f	t
voice	＋	voiced	voiceless	voiceless
place		labio-dental	labio-dental	alveolar
manner		fricative	fricative	plosive

	æ	z	s	t
voice	＋	voiced	voiceless	voiceless
place		alveolar	alveolar	alveolar
manner		fricative	fricative	plosive

- 英語の無声化は set phrase (成句)でしか起きない。
  has partied [hæz pɑːtiːd]や have fought[hæv fɔːt]の[z][v]は[s][f]とはならない。

- 同じ音に変化してしまったこと(assimilation)を強調するときは[hæf/s tə]と記述し，頭の中(phonemic level)では有声音のままであることを強調するときは[hæv̊/ż tə]，と書き分けることもできる。
  無声子音に先行する母音は短くなる(pre-fortis clipping)ことが区別のヒントにはなるが，音声(phonetic level)としてはあくまで[v̊/ż]は[f/s]で redundant な区別ではある。So ignore 17.3.b.!
- 前後の音の影響で発音が必ず変化するが，異音(allophones)に過ぎない場合は，副次調音(co-articulation)と呼ぶ。例えば/k/の主な調音(primary articulation)は{-voice, ＋velar, ＋plosive})なので，calm も crude も[k]となる。しかし calm の[k]は後ろの{＋open}な母音/ɑː/と co-articulate されて crude の[k]より{唇が広がり，舌先が下がる}(Bloch & Trager, 1942, Outl. Ling. Analysis ii. 29)。この場合の{唇が広がり，舌先が下がる}変化は co-articulation であって，assimilation とは呼ばない。
- 音韻の変化(/v/->/f/)を伴うのが assimilation で，異音に過ぎない({唇が広がり，舌先が下が}っても[k]は/k/としか書けない)のが co-articulation と考えて良いが，教科書の指導書でさえ混用がある。
- 一般に assimilation は optional（してもしなくてもよい）だが，co-articulation は obligatory(必ずそうなる)である。have/has to は必ず[hæf/s tə]なので，co-articulation 的でもある。念のため“Give all you have[hæv] to win the race!”との区別にも注意。

- tin cans と tin pans の[n]は，[ŋ]や[m]に調音場所が移動する。place (of articulation)の assimilation.
- tin cans

	i	n	ŋ	k
voice	＋	voiced	voiced	voiceless
place		alveolar	velar	velar
manner		nasal	nasal	plosive

- tin pans

	i	n	m	p
voice	＋	voiced	voiced	voiceless
place		alveolar	bilabial	bilabial
manner		nasal	nasal	stop

- right wing /rait wɪŋ/の[t]は後ろの[w]の place に同化され，[tʷ]になる。[ʷ]は口唇化を示すが知られていないので，[raip wɪŋ]と書く方が分かりやすい。同様に cat flap /kæt flæp/の[t]は後ろの[f]の place に同化され，[t̪ʷ]となり[̪]は歯音化を示すが，[kæp flæp]と書く方が直感的には分かりやすい。[kæp flæp]の[kæp]の[p]は[t]が labio-dental に同化し調音位置が前進していることを示す便法に過ぎない。
- しかし[raip wɪŋ]は/rait wɪŋ/に，[kæp flæp]は/kæt flæp/に，それぞれ聞こえないと困る（当たり前）。意味の区別ができるよう，音素としての性質を保つよう，同化は一部の変化（上の表では下線部）のみで生じる。tin cans の[ŋ]が[k]になれば(manner まで同化すれば)，それはやり過ぎ（変化しすぎ）。

- 同様に white coffee [ʍait kɔːfi]の[t]は[k](＝[tˠ])に，chocolate brown [ʧiɔkələt bɹaun]の[t]は[p]に同化するが，破裂音が重なると，前半の破裂はなくなり(unreleased)，最終的には破裂は一つになる。[ʍai kɔfi]と[ʧiɔkələ bɹaun]の形になるが，同化が進み省略(elision)されてしまったと考えれば良い。

- won’t you では[t]の place of articulation (調音場所)の alveolar が，後続する[j]の palatal の影響で後退。同時に[t]の manner of articulation (調音方法)の plosive は，後続する[j]が approximant で閉鎖しない（接近するだけ）ため，その影響を受け破裂-摩擦[t-ʃ]の連続，すなわち affricate(破擦音)[ʧ]となっている。

	n	t	ʧ	j
voice	voiced	voiceless	voiceless	voiceless
place	alveolar	alveolar	(post)alveolar	palatal
manner	nasal	plosive	affricate	approximant

- did you でも[d]の調音位置が後退(post)し，破裂の閉鎖が緩み破擦音化(d-ʒ/ʤ)している。二つの例から，manner の同化は place と同時に起きることが分かる。

	i	d	ʤ	j
voice	＋	voiced	voiced	voiced
place		alveolar	(post)alveolar	palatal
manner		plosive	affricate	approximant

- this year は同化なし[ðɪs jɪə]，調音位置の同化[ðɪʃ jɪə]，子音の省略[ðɪʃɪə]があり得る。
- tune [ʧuːm]/[tjuːm]のように揺れる語もある。破裂音の摩擦音化がない[tjuːm]の方が古い形。
- de-alveolar-isatio や coalescence という語は覚える必要なし。